

葉集を読む

松岡 隆子

噴水の冬の白さを崩れけり

宮崎美智子

うらかな冬日和の中の噴水であろう。真つ白な水の東が冬日を散らして崩れてゆく様は美しい。その白さは冬ならではの白さであり、冬麗の華やぎの白さである。冬の白さを崩れるという把握が詩情を高めている。

寒気を突き上げるように噴く噴水も見られよう。噴水は夏に限らず俳人たちの目を引く風物である。

茶の花や稿の下書き二度三度

河本 順

下書きなしですらすらと原稿が書けたらどんなによいだろう。私など二度、三度ならず何度も書き直すことが屢々である。掲句、推敲に推敲を重ねてやっと納得のいく文が書けた時の清々しい気分が想像される。(茶の花や)と(稿の下書き二度三度)の取り合わせの句であるが、中七下五の省略の効いた表現に対して即かず離れずの(茶の花)の選択は成功している。

気がつけば遠く来てをり落葉径

高野 達子

落葉の積もった雑木林の径を歩く。懐かしさに誘われるように、来し方を辿って行くように、ひたすら歩き続ける。何処まで行っても何かあるわけでもなく誰に会えるわけでもない。かさこそと鳴る落葉の音がただ寂しい。落葉径は過ぎし日々への郷愁の径である。思わず遠くまで行ってしまう径である。

路地の日を集めて菊の枯るるかな

国盛 千春

枯れゆくその色香を惜しむように路地の日差しが枯菊を包み込む。冬の日差しは弱々しい。その周りの日差しだけでは枯菊を包みきれない。(路地の日を集めて)と枯菊を主体にした詠みに、作者の慈愛の眼差しが見られる。

時雨るるや店を閉つとふ夜の電話

高橋いほを

新型コロナウイルス感染症の蔓延の影響は計り知れない。特に名のある老舗まで閉店を余儀なくされている飲食業界への影響は大きい。高橋さんの知る店も閉店になるという。夜の電話から察して行きつけの居酒屋か小料理屋であろうか。時雨の冷たさが身に沁みる。

咳一つ視線を浴びる会議室

中原 栄

大事な会議の真つ最中、堪えきれずに咳が出てしまった。